



話題の本棚

渋谷知美著『日本の包茎 男の体の200年史』

エリザベス・ヤング＝ブルーエル著、大島かおり他訳『ハンナ・アーレント〈世界への愛〉の物語』

特集／孤独

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/



univ.

京大生協

綴葉編集委員会

なぜ「包茎」は恥ずかしいことなのか

日本の包茎

男の体の200年史

澁谷知美著

筑摩書房



「俺、童貞なんだよ」、詭笑する気にもならないこんな戯言に時折酒席で出くわす。嗚呼、酔いも興もあったもんじやない、どっちにけだ。だが「俺、包茎なんだよ」と戯れに宣言する輩に出会ったことではない。いや、そもそもその宣言は戯れなのか。妙な生々しさ、痛切さを嗅ぎ取るのは評者だけだろうか。場に馴致される「下ネタ」もある一方で、「包茎」へのこの強い抵抗感は一休何なのだろう。

本書は『日本の童貞』で話題のジェンダー研究者、澁谷の新作だ。題名に度肝を抜かれた方もあろうが、その内容は多くの資料を渉猟しつつ包茎に関する言説、イメージの変遷を分析する大変意欲的なもの。日本ではマジョリティであるという仮性包茎に、なぜ男たちは「恥」の感覚を抱くのか。なぜ亀頭が露出したペニスに憧れるのか。包茎に関する不可思議な感情は、実は美容整形医やメディアによって捏造されたのではないか。彼女の眼差しは鋭く切り込む。

澁谷がまず注目するのは、かつて日本人男性が徴兵検査や入学試験の折々に受けねばならなかったペニス検査である。当時細々として「露茎」に見せよとする男たちは非常に多かった。そこには、理論化できない「包茎はとにかく恥ずかし」という恥の感覚が伺われるという。著者はそれを「土着の恥ずかしさ」と名付ける。

この恥の感覚が医療ビジネスと結びつくのは必然だった。まあなく包茎は「梅毒」や「淋病」と並んで「治療」されるべきものとなる。六〇年代に入り美容整形が高まりを見せると、見た目のコンプレックスを改善するのは性器も例外ではなかった。性交時の感度上昇という飛語も相俟って、包茎は「整形」すべきものと認識され始める。今でもネット空間で目に触れるほどに、この包茎言説がしぶとく存在し続けているのは何故か。著者はここに「フィクション」としての女性の目」を狡猾に利用した雑誌メディアの存在を見ている。

八〇年代、包茎記事が青年誌を一番賑わせた時代である。尤も「記事」とは名ばかりで、大半は整形外科が金銭を支払い書かせた「ステマ広告」だった。「記事」をかき集め、緻密に読み込む著者は、そこに数多見られる「女たちの包茎ディス」が、男によって依頼され、或いは「リアルな」女の意見であるように創作され、男に読ませると言う「男による男のための言説」だったことを指摘する。こうして男たちに都合よく利用される女性像は、男たちの女への敵愾心と恐怖を涵養し、「男の生きづらさ」に繋がると結論づける。

「もっとも手が汚れているのは、「女たち」ではなく、編集部と編集部にお金を出す医師である。」こんな言葉も飛び出しつつ進められる著者の分析は痛快でさえある。だが本書の目的は単に男たちの言説に潜む女性蔑視を暴くことではない。男の生きづらさを知ること、男も女も暴力から解放された社会を実現できるのではないかと、その思いが澁谷に本書を書かした。本書が女性研究者による「包茎」に関する書であること、それは極めて意義深い。（リンダ）

二八八頁 本体一六〇〇円 2月刊

時代に根ざした、時代を超える思想家、アーレント

ハンナ・アーレント

《世界への愛》の物語

エリザベス・ヤングブルーエル著
大島かおり・矢野久美子・桑田文・
橋爪大輝訳 みすず書房



偉大な思想家はみな、永遠的であると同時に時代的でもある。彼女らの思想は時代を超えて輝きを放ち続けるが、それはなぜかと言えば、彼女彼女らがその生まれ落ちた時代を徹底的に生き抜いたからにはかならない。偉大な思想家は、時代と真正面から向き合い、それと格闘したからこそ、永遠なる思想を生み出し得たのだ。

ハンナ・アーレントもその例外ではない。彼女はまさに二〇世紀という激動の時代を生き抜いた人だった。そして彼女は、二〇世紀という時代に深く根ざした思想家だったがゆえに、その時代を超えて長く読み継がれるテキストをこの世界に遺すことができたのだ。思想の永遠性は、徹底的な時代性より生ずる。ゆえに私たちは、アーレントがいかなる時代を生きたのかを知る必要がある。その時代に生じた出来事を、その時代に生きた人びとを、知る必要がある。ある特殊な時代状況から普遍的な思想が生まれてくるさまを描いた「哲学的伝記」たる本書を繰く意義は、まさにここにある。

今回、清新な翻訳で新たに生まれ変わった本書は、アーレントの決定版伝記だ。現に、アーレントの指導学生でもあった著者のヤングブルーエルは言う。「未来の伝記作家がアーレントの物語に重要な事実を付け足すことはない」と。この言葉に違わず、本書では、

アーレントという人間を形づくることになる様々な物語が時系列に沿って語られる。反ユダヤ主義に直面した子ども時代、師でもあったハイデガーとの恋愛関係、ブルーメンフェルトを通じたシオニズムとの関わり、ナチスの台頭にもとなうフランスやアメリカへの亡命、アンダースやブリュッヒャーとの結婚生活、リトルロック事件やアイヒマン裁判をめぐる論争——これらがその物語の一部分だ。

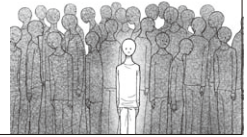
しかし、そこで「かならず示さなければならないのは、彼女の一般的な理論のもとにある歴史的な基礎であり、彼女の思想を生み出した特殊な経験、彼女を養った友情と愛である」。著者はこれらを、公刊された著作のみならず、インタビュー、往復書簡、詩などを通じて示そうとする。とりわけ、詩がふんだんに盛り込まれているのは本書の特徴の一つであり、そこには憂いに満ちたアーレントの姿を見て取ることができる。それは、著作を読むだけではなかなか見えてこない、アーレントの私的な顔だ——「その刻がやってくる／忘れて久しい／古い傷が、／心を蝕みそうになる刻が。／その日がやってくる、／どんな天秤をもってしても／人生の、あるいは苦悩の／重みを計れない日が。／その刻は去り／その日は過ぎゆく。／得られたものはひとつだけ／ただ生きていくということ」。

人はこの世界に生まれ落ち、死んでそこから去ってゆく。人は世界にしばしのあいだ滞在し、誕生と死に画された人生という一つの物語をそこに残す。本書が語るのは、そんなしばしの逗留のあいだに生み出された、アーレントの人生の物語だ。そこには、時代とともに生きた一人の人間としての彼女の姿が描かれている。（ばや）

（九二頁 本体七八〇〇円 3月刊）

〈特集〉

孤独



孤独、それは恐ろしい暗闇か、白く明るい沈黙か。長い年月が経ってもなお語り継がれる古典に孤独とは何か、答を探す人がいる。優しく寄り添う文体で書かれた物語に孤独の妙味を感じ、慰みを求める人がいる。孤独の原因を社会に見出し、孤独な自分を責めないでと願う人がいる。

孤独、その音は優しく、寂しく、脆い。私たちは風の時代と言われる現代で、どう孤独と生きよう。きっと皆、既に孤独を愛している。——明日も明後日も、孤独は鼓動と共にいる。

(トントンウ)

孤独とは何たるや

「じゃ、また」そう言って、僕らは別れる。各々が家路について、そして一人になる。どこか寂しい自分がある。これが孤独なの？ 一人でふと考える。今回は「孤独」についての特集だ。三人が一人で考えた「独り」について見ていこう。

孤独は「こどく」じゃない

「孤独」ってなんだろう？「広辞苑」には「仲間のないこと。ひとりぼっち」とある。

また、「みなし子と老いて子なき者」という意味もあるようだ。これはどうやら中国の古典『孟子』に既に使用例があるらしい。そこで、『孟子』を足掛かりに、中国古典を通して「孤独」について考えていくこととする。

まずは貝塚茂樹『孟子』（講談社学術文庫）でその語源について考える。本書は、「性善説」「王道政治」などで有名な孟子の思想を解説している。初学者にもわかりやすく、新たに『孟子』を知りたい人にも勧められる一冊だ。そんな『孟子』の中に、次の言が見える。

さて、世間には、「鰥」（年老いても妻のない者）、「寡」（年老いても夫のない者）、「独」（年老いても子供のない者）、「孤」（幼くして父を失った者）がありますが、

……文王が政治を行い仁政を施すにあたっては、必ずこの四者を救うことを真っ先にされました。（『孟子』『梁恵下』）
本来、「孤独」なる語は「孤」と「独」の二語だったことがわかる。さらに、この『孟子』の言を見ると、「孤」にも「独」にも「ひとり」という要素はないことがわかる。孤独は「こどく」ではなく、「こ・どく」だったのだ。

「独り」を慎む

『孟子』を見ることで、本来「孤独」という語は「ひとりぼっち」という意味では使われていなかったことがわかった。では、現代の我々の意味に近い「独り」について、中国の古典ではどのように論じられているのか。

次は宇野哲人『大学』（講談社学術文庫）で、「独り」について考える。

『大学』とは四書の一つに数えられ、『中庸』と並んで現代日本でも有名な古典である。本書は『大学』の全訳註であり、漢文に苦手意識のある読者でも、現代日本語訳だけを見ることができ、その思想のエッセンスを汲み取ることができると言いたい。そんな『大学』には次の言が見える。

前に言うところの「其の意を誠にする」というのは、自分で自分の本心を欺いてはいけないということである。……（自分に誠実か否かの分かれ目は、自分ひとりだけが知っていることなので）それで君子は独りを慎むのである。（『大学』「伝六章」）

これは有名な「慎独（独りを慎む）」の一説である。「君子（立派な人物）」が君子たり得るのは、誰も見ていない独りのときでも、常に身を慎んでいることにある、というのである。

この一節の続きに「徳のない人物は、無為に一人でいると善くないことをしてしまう」とあるように、『大学』では、「君子」と「小人」の違いは「独り」の過ごし方にあるとしている。つまり、独りであることそれ自体に正負の価値があるのではなく、その過ごし方・振る舞い方が価値を決めると言えよう。

「孤独」にならないためには？

とはいえ、両手をあげて孤独を礼賛する人は多くはないだろう。どうしても、孤独には負のイメージが付きまどってしまうからだ。そこで、最後に土田健次郎『論語集注』（東洋文庫）に



て、孔子と朱子に教えを請う。

『論語集注』とは、孔子の教え（『論語』）に朱子が注をつけたものだ。つまり、孔子の教えを朱子なりに解釈したものと言える。『論語』の「子曰はく。徳は孤ならず。必ず鄰有り。」（里人篇）の注として、朱子は次のように言っている。

徳は孤立せず、必ず似た反応を引き起こす。それゆえ徳のある者には、必ず（徳のある）似た仲間が従うのだ。これはあたたかも居を構えるときに隣人があるかの

孤独を抱えて生きる

生きている中で、自分だけで思い悩むことが必要な局面がある。そんな時こそ、小説の力が必要なのではないか。

次に紹介する小説の主人公達は、それぞれ孤独とともに生きている。それは彼らが、自分の人生に対して誠実である故だろう。大切なものと向き合うには覚悟が必要であり、覚悟とは自分一人の孤独な旅である。

小説を通して、悩みながらも生きてゆく人々の孤独を見つめることで、自分の足で人生を歩む勇氣をもちうることが出来る。

風のような孤独

よしもとばなな『イルカ』（文春文庫）の

ようだ。

徳のある人物には自然と徳のある仲間が集まる。そう朱子は解釈している。つまり、たとえ『孟子』のいう「孤・独」な状態であっても、徳を持つことで「孤独」を避けることができると言えよう。

ここまでは分析的に孤独について論じてきた。ここからは、日常の中で孤独がどのように描かれるのか、孤独と向き合う人々について、フィクションの世界を通して見ていこう。（出席点）



主人公キミコの生き方は風のような。固執、癒着を好まない。また、縁やタイミングに人生を委ね、それを自分の意思で変えることを意識的に避けている。

キミコはある時友人に頼まれ、「傷ついた女性たちが集う海辺の寺」で仕事をやる。頼まれた期間を終えたと、こみ上げる寂しさを振り払い、きっぱりとそこを去る。本当はいつでも寺に遊びに行ける距離にいたのだが、「東京に帰った」と嘘をつき、恋しい人々と

の繋がりをあえて断とうとするのだ。

キミコは、自分の生きる世界と絶妙に距離をとっているように見える。物語の前半で、彼女の考え方が形成された経緯が語られる。

「あの時から、私は淋しさを恐れなくなつた。ほんとうにおそろしいのは、自分が自分でいっばいになってしまつて、その孤独でなうちまわることだと悟つたのだと思う。」

キミコは、寂しさを誤魔化さずに、それを引き受けて生きている。それはとても勇敢で、自由で、酷く切ないことのように思える。

鉛のような孤独

『イルカ』で扱われているのが、自分を解放するための軽やかな孤独だとすれば、西加奈子『うつくしい人』（幻冬舎文庫）では鉛のような孤独が描かれる。

主人公の百合は、幼少期からの根深い生きづらさと戦つて生きている。その苦しさは彼女自身の行動によってしか解決できないものであり、孤独な戦いである。

百合には引きこもりの姉がいる。両親に溺愛され、「模範的ないい子」として育つた姉。そして社会に馴染めず、三五歳になった今も家から出ずに空想の世界に浸つて生きている姉。「私は姉のように失敗しない」という意地が、百合の生きる軸になっている。

百合に自分の意思はなく、全て「社会的に

価値があるか」を基準に選択している。「成功」している自分を、頭の中にいる姉に見せつけている。

姉という百合といい、重い孤独を抱えた人ばかりが登場する話だ。悩みもがいて生きている彼らはなぜ「うつくしい人」なのか。自分の内面との孤独な戦いの中で形成される「うつくしい」とはどのようなものだろうか。本書を読んで、じっくり悩んで欲しい。

光のような孤独

最後に、恋愛小説を紹介しよう。江國香織『きらきらひかる』（新潮文庫）は、アルコール中毒の笑子と同性愛者の睦月の、結婚生活の話である。笑子は睦月の恋愛を、睦月は証拠の情緒不安定を、それぞれ理解し寄り添おうとするが、完全に分かり合うことはできない。それでも、彼らは彼らのやり方で関係を築き、支え合つて生活している。

現代社会の孤独を語るには

孤独は切なさだけではない。なるほど、それは軽やかでも美しくもある。ただ、その孤独がもしあなたを蝕むなら、その孤独の起因は自分だけではないと知るべきだ。電車の隣の席に座る彼も、あなたの尊敬するスポーツ選手も、孤独を感じるのである。人々と共に生き、

どんなに好きな相手であっても、踏み込めず、寄り添つてくることができない領域がある。そんな中で、人を大切にするとはどういうことだろうか。

「ごく基本的な恋愛小説を書くことと思ひました。誰かを好きになるということ、その人を感じること。人はみんな天涯孤独だと、私は思っています。」

江國氏はあとがきでこう書いている。

人を好きになるのは無謀なことである。どうがんばっても近づけない部分が人にはあり、拭えない孤独を誰しも抱えている。その孤独を認めること、切なさを受け入れることが、人を想い愛することなのだと思う。

ここまでは、現代小説を通して「孤独」について考えてきた。孤独はその人が人生と誠実に向き合った証である。それはキラリと美しく、かけがえないものである。（荏漢）

この社会で共に孤独を観察しよう。

対人、対社会とのあいだに

個人と社会を論じる際、往々にして社会学という学問は客観的・俯瞰的な視点から展開される。果たしてその視点以外は社会学としてタブーなのだろうか。菅野仁『ジンメル・

『つながりの哲学』（NHKブックス）では、哲学者でもあり、社会学者でもあるジンメルジンメルの社会の捉え方を著者の個人的経験を交えて紹介する。

『友たち幻想』（ちくまプリマー新書）を著した人物でもある菅野が、私的な体験を通してジンメルを紹介するには理由がある。それは彼の学問観をより忠実に紹介することが可能になるからだ。〈相互作用論的社会観〉と言われるそれは、ジンメルが静的なものではなく、人と人の間、人と社会の間、といった関係の動的状態に関心を置いていることを意味する。

他者との関係を学問として捉えることにより、他者（社会）に対して私とは何なのかという問いに、本書は答えてくれる。ジンメルは、ほんとうの私という絶対的存在はない、すなわち他人との関係性において主体や個性が立ち現れると論じている。

あなたもいるが、人も、社会も共にいる。全てのあいだがあなたをつくると考えれば、孤独を感じる瞬間であってもその感情すらあいだによって生まれたものなのだ。

あなたの孤独は社会に？

社会とのあいだを考えるなら、自分が今どこにいるのか考える必要があるだろう。

広井良典『コミュニケーションを問いなおす』

（ちくま新書）では、都市や社会システム等の空間を通して人々の行動や心理を探る。ヨソのコミュニケーションに対して軽薄な社会は、日本日本の稲作時代から戦後社会に至るまで、上手く時代に適応するところかむしろそれを発展させたために続いてきた。

孤独というのは、「私」を他者や集団から切り離してしまう時に感じるものである。コミュニケーションをもたない孤立した「私」というのが、戦後高度経済成長期を中心とする工業化によって生まれた。ヨソを嫌い、コミュニケーションも持たない個人の集まりである現代に、また再度コミュニケーションを構築する必要があると著者は述べる。本書では〇〇学に固執せず分野横断的に人々の関心を惹きつける。コミュニケーションの構築こそ、あなたやあなた以外の孤独な人々の新しい処方箋なのかもしれない。

私こそ社会に必要だ

あなたが属している居場所の中で、あなたは自分が自分らしくいれるという意識はあるだろうか。自分が大衆に埋もれてしまう時に孤独を感じてしまう人も多いだろう。

消費社会では「あなたらしさ」を獲得できると謳った商品が売られ、あなたは消費する



ことで「らしさ」を買うことになる。国家に「あなたらしさ」をおいたポピュリズムの出現など現代には個人の「らしさ」に関わる問題が多くある。

宇野重規『私』時代のデモクラシー』（岩波新書）では、ミクロ的観点で現代人の社会状況を考察し、マクロな視点でデモクラシーを明らかにする。本書は、現代のデモクラシーの限界を個人的かつ社会的レベルの平等や正義に焦点を当てて書かれている。個人／社会、社会／政治がセットで語られることはあっても、個人／政治というのは、見えてこないことが多い。しかし、著者はそのつながりに着目し、社会問題の根源を明確にする。

デモクラシーはあなたを必要とする。社会はあなたがいて始まる。社会に流れる時間をあなたらしく生きるために、今を孤独と言わず、現代社会に感わされぬよう、社会や政治と向き合う時間が大切だ。

いかがだっただろうか。「孤独」の語源を理解し、独りでどう過ごすべきか考えさせられた人——離れて人を想い、冬の夜風を吸い込んだ時のツンとした寂しさを思い出した人——社会を多角的に見る視点から現代に生きる意味を熟考する人——自分の感情と向き合い、各々の「孤独」の趣に合せて読んでいただきたい。

（トントウ）

新刊コーナー

いまきみがきみである
ことを白井明大詩 カシワイ画
書肆侃侃房

白井明大の詩は風
のようである。
どこからはじまり、
どこで終わったのか
も分からない。ただ頬を撫でていくように通
り過ぎ、その肌触りだけが残っている。読み
返してもすぐに忘れてしまうのに、言葉の音
色が心に触れたことだけは覚えている。

《『帰りたい』

じぶんの部屋にいるのに、そうつぶや
いてしまう言葉だけは、きっときみの
ことをわかっていったんだ。《

カシワイの絵は川のようである。

淡い色に、おぼろげな線。透明感と清らか
さ。描かれる、無表情な瞳に、シン
ブルだけど静謐な構図に、記憶にない懐か
しさを感じてしまう。喪われることが、ど
こかで美しさにつながっていることを、言葉に

しないで教えてくれる。

《肝ったあとの願いごとは
もう見向きもされることもない
ようやく星は
ひとりになれた》

川に風が流れるように、白井の詩にカシワ
イの絵が寄り添っていく。透明な水と軽やか
な風が交わる所。余計なもののない詩と、余
分なものがない絵は、きっと、あなたがあな
たであることに微笑んでくれる。(きもの)

(二〇八頁 本体二二〇〇円 12月刊)

正欲

朝井リョウ著
新潮社

「正常」と「異常」。
この二つの言葉の鉤
括弧を外すことを、
僕はもう易々とはい
できないだろう。朝井リョウの『正欲』を読み
終えた時、自分の思う「正常」と「異常」の
境目が、ひどく曖昧な社会規範によって規定
されたものであることに、気付かされたから

だ。

物語の序盤で流れるのは、「異常」性癖の
人間が起こしたよくある事件のニュース。そ
の事件の内容を聞いた人々は、犯人の動機を、
ペドフィリアとして理解されている性癖に帰
属させ、「異常」の烙印を押してしまう。し
かし、この犯人の真の性癖は決してペドフィ
リアなどではない。人々はその事実にあきづき
もしないし、考えを巡らせなどしない。それ
もそのはずだ。あまりにも理解の範疇を超え
た「異常」性癖は、その存在を知ることすら
定することすら難しいのだから。

本書は、「異常」であることに苦しむマイ
ノリティに焦点を当てるのみならず、マジ
ョリティに属する人間たちの「正常」さに対
しても疑念を投げかける。パンを性器に見立
てて冗談を飛ばし合う男子たちや飽きっぽく
てパートナーを乗り換える主婦、性行為の際
に相手の涙に興奮する男……果たして彼らは
「正常」な人間であると本当に言えるのだろ
うか。一人一人の人間の中にも固有の「異
常」さがあるのではないか。その疑念は、マ
ジョリティ同士も決して、わかりあえてなど
いないという現実を示す。その現実を前に、
我々はどういうように生きていけばよいのだ
ろうか。

(二八四頁 本体一七〇〇円 3月刊)

文豪たちのスペイン風邪

紅野謙介・金貴粉編・解説

皓星社

映画を観ていて驚

いた。道行く人々の

口元にマスクがない。

だがそれも当然、そ

の映画が撮影されたのは三年前だった。そう
か、外に出れば皆がマスクをしているなんて
後にも先にも今だけだもん……そう思っ
たら違った。なんと百年前も人々はこぞマ
スクをつけたという。何故か。スペイン
風邪だ。



二〇世紀初め全世界に蔓延し、日本でも数
十万人を死に至らしめたスペイン風邪。この
感染症が流行する最中、日本の文豪たちが書
き残した作品を寄せ集めたのが本書である。
百年前、パンデミックの中彼らは何を思っ
ていたのか。与謝野晶子の作品を取り上げよう。
当時一人の子を抱える母親だった晶子の
心配は余りに大きかった。それ故感染対策が
常に後手に回り、矛盾した言説を振りまく政
府への見解は辛辣だ。「社会的施設に統一と
徹底との欠けて居る為、国民はどんなに多
くの避らるべき、禍を避けずに居るか知れま

せん。」まるで現在の新聞の投書を読ん
でいるかのようである。では政府を頼みに出来ぬ
時、彼女はとうしたのか。「私は家族と共に
幾回も予防注射を実行し、其外常に含嗽薬を
用い（……）私達の境遇で出来るだけの方法
を試みて居ます」。こうして彼女は「抵抗」
を試みた、病気に、政府に。ロマン主義の代
表的歌人が身近に感じられるのは評者だけだ
ろうか。

本書には他に、スペイン風邪がカギとなる、
谷崎潤一郎の犯罪小説など多種多様な作品が
収録されている。当時、マスクの下に隠れて
いた文豪の素顔を覗いてみないか。（リンド）
（二〇〇頁 本体二〇〇〇円 2月刊）

小説禁止令に賛同する

いとうせいこう著

集英社文庫

時は二〇三六年、

亜細亜連合の新

局が「小説禁止令」
を発布したばかりの



頃のこと。東端列島の地区第三集合棟独
房に収監された文学関係者「八十六号」は、
収監者に配布される小冊子への連載を担当す
る。本書は、彼が「小説そのものの欺瞞」を

暴き出すことで、禁止令への賛意を表明した
「随筆」の数々である。

彼の小説批判では、夏目漱石や中上健次ら
の作品が槍玉に挙げられる。作中の人物が別
の人物の心を（不自然に）見透かし、小説内
部にその小説自体が登場してしまう——この
ような、小説特有の不可解さに切り込み、小
説と随筆との違いを分析するに至る姿勢は、
それ自体としても非常に興味深い。

得体の知れない一人称が不特定多数に向
けて語りつづける、という形式は、芥川賞候補
作ともなった『想像ラジオ』のそれを踏襲す
る。ただし、センセーショナルなタイトルを
もつ今作を、端的に「小説」とみなせるかは
実に悩ましい。もしこの自称「随筆」が、メ
タ的に私たちをして「小説」と呼ばせようも
のならば、結局のところ「禁止令」への賛同
は不首尾のうちに終えられるばかりである。
あるいは逆説的に言って、そのような読みが
可能である程には「八十六号」の心は小説禁
止へとなびいていないとでもいうのだろうか。
ディストピアの枠組みを超えて示される、
自家撞着スレスレのこの「緊張関係」は本書
の大きな読みどころである。小説禁止への賛
否はともかく、この奇妙な読書体験は、読者
を不思議な境地に誘うことだろう。（八雲）

（一九二頁 本体四六〇円 11月刊）

フードコートで、また明日。

成家慎一郎著

KADOKAWA



これは、女子高生二人がフードコートで駄弁るだけの漫画である。……あ、どうしよう……一行で解説できてしまった……紙面が埋まらないからもっと解説しなくちゃ……。

幼馴染ではあるが、少し前までは絡みがなかった女子高生の二人。人畜無害な優等生に見える和田と、イケイケで突ったギャルに見える山本。放課後に彼女らは毎日、電車で揺られ、とあるフードコートでおち合う。そして、山本のバイトの時間まで、ひたすらに駄弁り続けるのだ。とにかく和田がよく喋る。

しかし、なぜ女子高生が駄弁るだけの漫画がオススメに値するのか。それは、僕らがいつか体験したであろう、友達だからこそ間に巻き起る感情の機微を、この漫画がありありと思ひ出させてくれるからだ。例えば、喧嘩した次の日に顔を合わせる時の気まずさ、いつもにも増して気を使ってしまうあの感じ。相手に恋人の影を感じて、自分を蔑ろにされ

るのではないかと不安になる心……。二人の想いがひしひしと伝わってくるのはなぜか。敢えてセリフを抜いたコマを効果的に挿入することによって、表情とその背後にある心を浮かびあがらせる技法など、成家慎一郎氏のセンスが細部に宿っているからに違いない。見た目も中身も正反対の二人は、価値観の違いを感じつつも、お互いの大切なものを共有し、理解しようとする。時にすれ違つが、それでもフードコートに向かい、また駄弁る。微笑みしつて、少しきこちない友情を、是非味わってみてほしい。(ましゅ)

(一六二頁 本体八四〇円 3月刊)

韓国映画・ドラマ

わたしたちのおしゃべりの記録 2014~2020

西森路根 ハントントン著 駒草出版

結論から言おう。

本書には結論などない。著者が扱うのは、現代の課題だ。

容易に答えが出るはずがない。見えにくい「敵」を相手に、必要なのは「おしゃべり」だった。

アジアのエンタメに通曉している文筆家と



在日コリアンの背景をもつ社会学者。両者の対談と個別記事がいま一冊にまとめられた。

『パラサイト』や『愛の不時着』といった有名「こころは勿論だが、それ以外の話題も見逃せない。K-POP、フェミニズム、『マッド・マックス』を語り合い、はたまた京大をモデルにした『ワンダーウォール』まで。舌鋒鋭いハンに対し、西森はしなやかな語り口で応える。この両極が織りなす対話が、とにかく刺激的だ。素敵滅法この上なしである。

作品を愛でるからではない。彼女らの「おしゃべり」は、常に韓日の現実と潜む困難な事態を挟り出そうとしている。だから目を離せないのだ。こう書くとき曖昧だと思われる方がいるかもしれない。だが実際に現実が曖昧なのである。韓国の現代史は変転し続けている。政権は代わり、格差は劇化した。逆に日本の現代史は、変革の機を逸し続けている。公的なものの信用は墮ち、私的な繋がりは傷だらけだ。両国の敵は捉え難い。それでも手探りで、論以前の段階で言葉をつ紡がねば始まらないだろう。本書にしかと記録された「おしゃべり」は、そうした誠実な試みである。

「いいよね!」や「アカンな」を言い合う喜びにも満ちた一冊だ。ついこちらにも感想を喋りたくなる。きっとあなたも。(とふ)

(二八四頁 本体一七〇〇円 3月刊)

ケアメディア論

孤立化した時代を「つなぐ」志向

引地達也著
ラグーナ出版ケアメディア論
たれもが情報発信できる
時代の論議とは？

新聞やテレビが衰え続け、有象無象のネットメディアが現れては消えていく。

仕方なく眺めるのは、あらゆるヘイトが放置されたツイッターのタイムライン。著者の引地達也はこれから必要とされるメディアは「ケアメディア」であると論じ、その概念を構築しようとする。

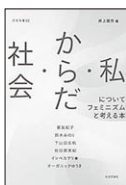
著者は一九七一年生まれ。毎日新聞記者や共同通信特派員を経て、現在は精神科患者の社会復帰に向けた支援活動という「ケア」に携わっている。著者は精神科病院に入院しているある男性の心理検査報告書を例に、その無味乾燥とした記述の暴力性には当事者視点不在の問題があると指摘し、その問題はマスメディアと通ずると論ずる。しかし当事者に近づきすぎると対象を突き放して見ることは難しくなり、権力を批判することもできなくなるかもしれない。当事者を救う「ケア」と、権力と闘うなどジャーナリズムの理念を両立させるメディアはどのように構想されるのか。

著者はマクルーハンなどを引用しつつメディアを根本から問い直し、海外の新たなジャーナリズムの事例や、精神医療の現場で使用され始めたオープンダイアローグの思想を取り込みつつ、ケアメディアの形を模索する。

媒体を問わない、誰もが対等に情報を受発信できる場でありながら、いま取り上げるべき問題の解決に向かって「共通善」を目指せるような、ケアメディア——その実現はまだ夢物語であろうが、メディア史を振り返り、これからのメディアに必要な要素を考えられる一冊である。

(二五〇頁 本体二〇〇〇円 12月刊)

(石透)

社会・からだ 私について
フェミニズムと考える本井上彼方編
社会評論社社会・からだ
私について
フェミニズムと考える本

「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」とポーヴォールが言っている。最近ではフェミニズムへの関心が広く受け入れられている。だが女性であること、さらにはトランスジェンダーであることが理由で生き辛い思いをする、

あるいは肩身の狭い扱いを受けることはまだ少なくない。本書では社会においてそのような悩みの根元に何があるのか、セックススワーカーについての考察、写真家との対談、当事者のレポート、小説など様々な事例から探っていく。

セックススワーカーについての考察では、この問題が様々な様相を含んでいることが示唆される。たとえばセックススワーカーは「仕方なく」従事している「可哀想な存在」なのか？ あるいは男性のセックススワーカー問題は女性のそれに比べて表面化していないが不平等ではないのか？ などである。そんな風にとみると、必ずしもフェミニズムとは女性だけを対象とするのではなく、むしろ女性・男性などカテゴリーに当てはめてしまう構造そのものに焦点を当てて問題提起をしているようにも思われる。レポートや対談では、自分が何者であるかわからないという当事者の悩み、あるいはモデルとなった相手に対しその人自身を映し出せるようにと考える写真家の言葉が綴られる。

自分が自分であることを認めるのは誰か？ 自分のはずだ。しかし実際には「自分になる」のかもしれない。「なる」から「ある」へ至るには……まだ先は長い。

(ねこ)

(二六〇頁 本体九〇〇円 12月刊)

菊竹清訓 山陰と建築

斎藤信吾・塚本二朗・

Echelle-1 編
Echelle-1

戦後日本を代表する建築

家、菊竹清訓。京都市内を

含め、現在も日本各地で彼

の作品を目にすることがで

きる。それは松江や出雲、

米子といった山陰の地方都

市として例外ではない。彼の没後一〇年を記念

して開催された、島根県立美術館（この建物

自体も彼の設計による）での展覧会に併せ、

本書は刊行された。

紙面は、「島根県立図書館」やホテル「東

光園」といった、今も山陰地方に残る作品の

写真から構成されている。また、設計時のス

ケッチや図面の一部、設計者の意図を述べた

彼自身のコメントも収録し、完成した作品の

ビジュアルとそこに込められた思想の両面から

菊竹建築の神髄を捉えることができる。

ここでは山陰の菊竹作品からひとつ、「出

雲大社庁の舎」を紹介しよう。神社の境内に

はいささが不似合いなコンクリートの直線的

デザイン、そしてその内部に広がる台形型の

空間——一九六三年のこの作品は、ひと目見



ただけでも、見た者にその強烈な印象を与え

ていく。惜しむらくはこの作品が現存しない

ことであるが、資料に添えられた菊竹のコメ

ントからは、この作品が出雲地方の「稲掛

け」をモチーフとすることや、建築材料の選

定に至る経緯など、往時の様子が偲ばれる。

本書後半でも取り上げられてはいるが、評

者の地元の子役所や市民館も菊竹によるもの

だった。設計に関わる彼のコメントを読んだ

今、子どもながらに好奇の眼で眺めていた

〈ヘンなカタチの建物〉は、真正な〈建築作

品〉として立派な姿で立ち現れる。（八雲）

（一二八頁 本体三五〇〇円 3月刊）

ディスタンクシオン（普及版）

〔社会的判断力批判〕

ピエール・ブルデュー 著

石井洋二郎訳 藤原書店

《階級とは存在

するものではな

く、発見される

ものである。》

英語でいえば

「distinction」であるこの単語は、卓越化・差

異化として訳される。本書は自分たちの振る

舞い・趣味・美意識に至るまで、それらが階



級的に区分されることを美証的に明らかにす

る。「階級」が、過去の用語だと思ふ人こそ

手に取ってみてほしい。

例えば、「美しい」と思う感性について。

ある絵画を見て綺麗だと思ふ、文章を読んで

恍惚とする。しかしその感性こそが階級によ

って形成されたものだとなら……。絵画や

文章の中に美を見出すその感覚には、文化資

本が深くかかわっており、格差が如実に出て

しまう。

さらにブルデューは「正統性」の議論の中

で、趣味において《正統性の押し付け》が行

われてきたと指摘する。純文学は大衆文学よ

りも高尚であり、ピアノはギターよりも上品

とされる。こうした正統化＝卓越化の中で、

文化貴族的振る舞いへのレースが行われる。

あなたが《クラシックをたしなみ、古典文学

について語れる人間》に憧れるならばそれは

何故だろうか。そこに優れた人間像と、周り

からの優越願望が入っていないだろうか。

長く中流社会といわれてきた日本だが、政

治家には二世議員が多く、東大や京大の合格

率は親の所得と比例している。しかし中々階

級は自覚されない。豊富な実証研究で明らか

にされる本書を読めば、分断される社会の実

像が分かるかもしれない。（きもの）

（五二八頁 本体三六〇〇円 11月刊）

英語独習法

今井むつみ著
岩波新書

認知心理学に基づいた英語学習法を提案する本書は、英語のみならず語学学習に悩む全ての方にお薦めである。

本書では、ほとんど意識されないある事柄についての枠組みとなる知識体系である「スキーマ」に、意識を向ける英語学習法が紹介される。布団を乾かす／布団を干す、は両方違和感がないが、猫を乾かす／猫を干す、だと後者には強い違和感がある。これは「乾かす」と「干す」の共起表現に微妙な違いがあるためだが、日本語ネイティブは違いを意識せずに使っている。これが言葉のスキーマだ。外国語を学ぶ者は、この言葉のスキーマに意識を向け学習すべきだと言うのだ。

本書ではこのスキーマに意識を向ける英語学習の方法論と、すぐ使えるオンラインツールの使い方が紹介されている。その方法論は英語のみならず全ての語学学習に役立つ。本書でも十分だが第二言語習得論の本、例えば白井恭弘『外国語学習の科学 第二言語習得論とは何か』などと併せて読めば、語学学習の方法論ははっちりで済む。(投稿・行人)

(二八二頁 本体八八〇円 12月刊)

見るレッスン

映画史特別講義

蓮實重彦著 光文社新書

御年八四歳、東大総長も務めた蓮實重彦。蓮實は新書を嫌っており、本書はなんと初めての新書である。「もっぱら自分の好きな作品だけを見つめるために、映画を見てほしい。」という読者へのメッセージに対する、蓮實なりの回答であるかのような一冊。

インタビュー形式で本書は進行していく。扱われるテーマは古今東西様々だ。ヌーベルバーグや溝口健二など蓮實が何度なく論じてきたテーマから、濱口竜介や三宅唱の最新作、小森はるかやドキュメンタリー映画、東京国際映画祭やNHKに対する「喝」に至るまで、現代ではあまり見なくなったような舌鋒鋭い批評が踊る。

誰にも媚びず、明快に評価を下す蓮實の言葉を受け、読者の心は波立たずにはいられない。しかしその波立ちこそ、蓮實が映画を見る上で重要だとする「異質なものに晒され、葛藤すること」と向き合うきっかけかもしれない。「映画が分かるということは安心感をもたらすが、(中略)その安心を崩す一瞬にまずは驚かなければならない」。(石透)

(二〇三頁 本体八二〇円 12月刊)

原子力の哲学

戸谷洋志著
集英社新書

「原子力の哲学」——このタイトルを見て中にはこう訝しむ人もいるだろう。原子力は科学的・技術的な問題ではないのか、原子力を哲学する必要などあるのか。これに対して、著者はこう心える。科学的・技術的な言説で原子力を語ることは限界がある、だから「原子力の哲学」は必要なのだ。

原発事故がもたらした言葉にならない痛みは、科学的・技術的な言葉だけでは表象し得ない。だからこそ、そうした痛みに言葉を与え、そこで何が起きたのかを理解可能にする哲学という営みがまさに今、要請されているのだ。

本書に登場するのは、ドイツやフランスを代表する名だたる哲学者たち。彼らは同じ原子力について論じながらも、種々様々な議論を展開する。とくに、原子力の脅威を原子爆弾と原子力発電のどちらに見出すのかは重要な論点だ。後者に脅威を見出すハイデガーやヨナスは、「原子力の平和利用」の名のもとに隠された原子力の危険性を暴こうとする。福島第一原発の事故から一〇年が経った今、手に取るべき一冊だ。(はや)

(二五六頁 本体八六〇円 12月刊)

まだ見ぬコーヒーマス・デモクラシーのために

いま民主主義の精神は暴力と危機に晒され、多くの関連書籍が書店を賑わせている。本企画ではそんな注目の論題に、「コーヒーマス主義」という言葉から接近を試みる。勿論そんな専門用語はない。だがコーヒーマスと民主主義の歴史的繋がり、そして今日の「コーヒーマス」民主主義からは、この思想の過去と今が見えてくる。

コーヒーマスで語る民主主義の成立史

人民が議論を通して権力行使する民主主義は、話し合いの場を必要とする。一八世紀前後のロンドンに現れたコーヒーマス・ハウスはそのための格好の空間であり、大流行を巻き起こした。ドイツの思想家ハーバーマスは初期の著作『公共性の構造転換』（未来社）の中で、コーヒーマス・ハウスの社会的機能をフランスのサロンと並べ論じている。「これらは、イギリスでもフランスでも、最初は文芸的な、やがては政治的な批判の中心であり、その中で貴族主義的社交界との間に、一種の教養人としての対等関係が次第に形成されていく」。身分差を前提とした社会が、コーヒーマスを通して新たな市民社会へ矯正されていった。この点は臼井隆一郎『コーヒーマスが廻り世界が廻る』（中公新書）でさらに詳述されている。当時の支配的勢力に対抗する世論を形成するために、コーヒーマス・ハウスは時に「私設議会」へと早変わりする。毎晩と続く会合の中では、議論と投票が行われていたという。その際給仕が運ぶコーヒーマスは、大いに議論を促進したことだろう。臼井の簡潔な表現の通り、コーヒーマス・ハウスの雰囲気の中には「デモクラティックな精神」があったのだ。ただし当時の「民」に含まれたのは、ごくわずかな者達だけだ。ハーバーマス、臼井両氏が指摘する通り、コーヒーマス・ハウスへの参

加者はおもっぱら男性に限られていた。女性を家庭に閉じ込めた市民社会の論理が、喫茶店を「男性のための制度（臼井、八五頁）」へと矮小化していた。またコーヒーマスは植民地で特に栽培された商品でもある。各国が競い合い南半球の侵略を進め、土地に根差した共同体をまるごと奴隷の立場へと貶めた。歴史の中にある民主主義とコーヒーマスの関係は、決して一義的なものではない。

コーヒーマス的な民主主義の現場へ

コーヒーマス的な、つまり出来上がりが遅く苦みのある民主主義のいまを紹介する書籍がある。秋山訓子『コーヒーマスを味わうように民主主義をつくりこむ』（現代書館）では、世界中の市井の人々が紡ぐ民主的な実践が、政治記者の視点から示されている。インドネシアのあるカフエは、女性の権利を護るNGOの拠点だ。経営者の一人エラさんはその代表を務め、差別の実態調査や被害女性の声を拾う活動に取り組んでいる。被害者の傷ついた心が開けるよう、彼女は丁寧に関係を形にしていこう。語られている事例は理想的なものばかりではない。難民としてベトナムからアメリカへ渡り、新天地で様々な才を開花させたチ・ウェン。彼女はNPOでも積極的に活動を行おうが、その後組織を離れたという甘くない現実には、まさにその現実味を通じて、未完の民主主義への読者の目を覚ましてくれる。

コーヒーマスは公論を広げる一方、人権侵害にも加担した。真にコーヒーマス的な民主主義は今芽生え始めたばかりだ。その先の未来については、コーヒーマスを啜りながらまた誰かと語り合いたい。（とよ）



偽史への誘い

約一年前、大きな反響を呼んだ新書が刊行された。それが『椿井文書』（中公新書）である。江戸時代の人物、椿井正隆の元にあった、あるいは彼が調べたと思われる文書、それらが実は寺社や富農へ由緒を与えるために都合よく捏造した史料だったというものだ。由緒ある史料の史実を盛り込みながら合間に創作部分を紛れ込ませる、例えば家系図や縁起絵図などの模写の際に創作を描きこみ、それを流布させることで彼は虚偽の歴史を広めた。椿井の巧みなどころは、文書同士で相互に関連性をつけることで信憑性を補強するという方法を採用したことにある。古文書解読に明るくないと椿井作の文書同士を参照して造られた信憑性に嵌ってしまう。さらに椿井文書の場合、由緒を得られるという利得的動機によってそのいかかわしさに異論を唱えることが憚られ、それが巡り巡って公的機関によるお墨付きにつながってしまったという経緯があるようだ。

史料の捏造、そしてそれを元にして創作された歴史が史実として受容されてしまう場合がある。そのような歴史を偽史と呼ぶ。「椿井文書」のみならず歴史上では様々な偽史と偽書が存在する。たとえば日本では「東日流外三郡誌」など有名なものがある。昨年十二月号の『ユリイカ 特集Ⅱ偽書の世界』では日本のみならず世界の偽書について特集が組まれ、各評者が考察を加えている。古代の歴史に関して何故このような偽書が伝わってしまうのか。それに踏み込んだ興味深い記述が『偽書が揺るがせた日本史』（山川出版社）の最初に述べられている。

「偽史」と言うためには「正史」がある。



もともと、中国において統一を果たした王朝が自らの正統性を示すために「正史」を作り、それと異なる歴史を「偽り」とした。つまり、正史は為政者に都合の良いイメージという一面を持っているのだ。それゆえに、イメージではない実状を探ろうと正史と批判的に対峙する際に偽書が、「偽史」が寄り添ってしまふ。時代の変わり目に過去を批判的に振り返る時、偽史の生まれる可能性が生じる。日本におけるその大きな変わり目の一つが明治維新以降の近代への変化といえるだろう。近代におけるそのような言説を取り上げ掘り下けているのが『近代日本の偽史言説』（勉誠出版）である。日本は近代において皇国史観というイデオロギーに沿った歴史を「正史」とし、そこからナショナリスティックな思想も広がった。しかしその裏側で「偽史」が席巻することになる。面白いのは、新しく西洋との関連を自称する偽史の類が出てくることであろう。例えばユダヤ人に関しては「シオンの議定書」で陰謀論が囁かれ悪玉扱いされたと思えば、「日ユ同祖論」で日本人との親和性が喧伝されるなどその時々によってセンセーショナルな扱いを受けていたのである。そこには、西欧という他者に相対した日本が同質性と自らの優位性を主張しようとした痕跡を見てとれるかもしれない。

ないことの証明は出来ない。それゆえに史料の空白部分に偽史はそっと残り、「正史」に飽きたらない人々を魅了し続ける。先月号企画で「歴史叙述なくしては、歴史的事実が事実として認められることはない」と述べられているが、偽史こそ叙述によって作られた歴史の典型といえよう。さて、このように捏造されるのは歴史には留まらない、文学にもある。そのうちにまた取り上げたい。（ねい）

編集後記

「——だから、桜の花びらになりたいの」
彼女はか細い声で呟いた。「それって素敵なことじゃない？」

それから僕たちは、たくさん話を少しだけした。散歩が好きなこと。春が好きなこと。桜が好きなこと。デルタが好きなこと。僕たちは、たくさん、たくさん話を、少しだけした。たくさん話したけれど、彼女のことは少しもわからなかった。

もう帰らなくては、と彼女は徐に歩き出した。僕に背中を向けて、僕から遠ざかっていく。じゃあ。またいつか。その彼女の背中を見て、思わず叫んだ——

——僕も、僕も桜の花になりたいのかもしれない

そうすれば、もっと彼女と話ができると思ってた。また彼女に会う口実ができると思って。

彼女は立ち止まり、振り返ることなく応えた。「桜の木の下で、また会いましょう」。桜の木の下で、また会いましょう……そんなどこかのケータイ小説にありそうな展開。僕は舞い散る桜の花びらを手に取り、ポケットに入れた。この桜の花びらが、また僕を春に導いてくれると信じて。

(出席点)

当てよう！ 図書カード

春が訪れたかと思いきや、すっかり夏を感じ、木々の葉も青々となりましたね。さて、5月といえばフィンランドで一年を通して一番といっても過言ではない程盛り上がる学生の日というものがあります。フィンランド語では何というでしょう？

1. オビスケリア
2. ヴアップ
3. メーデー
4. キッピス

(トントウ)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。ウェブサイト (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) からの応募も可能です。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。応募の締め切り日は6月15日です。

1・2月号の解答

1・2月号の問題「第二次大戦から内戦までユーゴスラビアの激動の歴史を描き切った大作映画はどれでしょうか？」の正解は、
2. アンダーグラウンドでした。クストリッツァ監督の映画作品は音楽も印象的ですよね。図書カードの当選者は、Sosoさん、ストックさん、ほたてさん、NTさん、灯子さんです。当選おめでとうございます。(リンダ)

読者がらひつじ

○『言語の七番目の機能』のそうですが、ジャンルがはっきりしない作品を最近好ましいと思うようになってきました。一粒で二度も三度も美味しいからか、割り切れない現実在即している気がするからか……本の虫としては王道も大好きですが、「奇妙な本」にも心惹かれます。(防災研・ストック)

——「割り切れない現実在即している気がするから」というのは少し分かる気がします。尤も、この感情を私は文学よりも映画の方に強く感じます。容易には言葉出来ないモヤモヤや衝撃、後味の良さ/悪さを大切にしながら、私の足は今日も出町座に向かいます。

○(特集の)「少年漫画と『からだ』」の目線が最も面白く感じました。学問にするにはどの分野になるのか難しいテーマですが、何とかそちらに研究のカジを切りたいものです……。(文・灯子)

——特集をお読み頂きありがとうございます。今回の特集は、担当した三人それぞれに「からだ」に対する熱い思いがあっただけに、そこから一つの流れを見出すのはとても骨が折れました……本当に取り組みたいと思えるテーマに出会えると良いですね。(リンダ)